

平成30年1月3日

## 南の風ウインターカップ特集号Ⅲ

南部ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

ウインターカップ女子決勝戦の私の感想です。両チームの戦術について書きます。

### 《ディフェンスの戦術》

まず大阪桐蔭です。終始3-2のゾーンディフェンスをメインにして状況に応じて1-3-1も使用していました。特に長身の15番竹原選手（185cm）がベンチに下がった時に1-3-1のゾーンが多かったです。特長としては、相手が不用意にコーナーやサイドラインにパスした場合のダブルチームが素早く、簡単にボールを回させないこと（パスを予測してボールマンを潰す）の徹底がなされていました。今大会を通して、大阪桐蔭はこの3-2のゾーンディフェンスがしっかり機能し、対戦相手を苦しめました。特に準決勝では、桜花学園の得点を54点に抑えオフェンスをほぼ完璧に封じ込めました。また、大阪桐蔭はゾーンディフェンスにおけるリバウンドにも工夫が見られました。通常ゾーンディフェンスの欠点として、ボックスアウトが難しいということがあるのですが、大阪桐蔭選手は相手のシュートに対して落下点の予測が見事でした。シュートされたボールの軌跡からどこに落ちるかの読みが適確なので早く跳び込めるのです。そしてオフェンスリバウンドを取られた時やボールがルーズになった時の対応も素早く抜け目がありませんでした。さらに特徴的だったのは、インサイドアウトの守りが徹底していたことです。ドライブされたり、ポストにボールが入ったりした時にダブルチームで潰すのですが、その後のキックアウトに対しての反応がたいへん早く、簡単にロングを打たせないことがチーム全体にしっかり浸透していました。このようなディフェンスは頭では理解できるのですが、いざゲームでやるとなるとたいへん難しいことなのです。それをきちんとやり切るところに大阪桐蔭の凄さを垣間見ることができます。もう一つ付け加えると、大阪桐蔭はフリースローやフィールドゴールがあった時に3/4コートで1-2-1-1のゾーンプレスを仕掛けたことです。相手のちょっとした油断や集中力を欠いたパスを狙うのが目的でしょう。安城学園が完全に引っかけたりパスミスしたのは1回だったのですが、精神的な圧力にはなったと思います。最後に要所ではマンツーマンで守る場面があったことも付け加えておきます。（4Qの最後やOTの同点場面）

さて続いて安城学園のディフェンスです。メインのディフェンスはマンツーマンでしたがどうやらマッチアップゾーンも使っていたようです（特に後半）そしてマッチアップゾーンの時は、かなり中（ペイント）を絞ってディフェンスしていました。特徴的だったのは、相手（大阪桐蔭）のエース15番竹原選手の守り方です。ボールサイドに竹原選手がいる場合、彼女に付くディフェンスはサイディングローで付き、そして逆サイドの3線（フロート気味）が、常にパスカットか竹原選手にボールが入った時のダブルチームを狙っていたことです。徹底していました。竹原選手は、準決勝の桜花戦は35点、準々決勝の東京成徳戦は29点取っていたのですが、このゲームでは結果トータル7点しか取れていません。1Qからしっかりマークされ、相当フラストレーションが溜まっていったものと思います。そして安城学園のもう一つの特徴は、フィールドスローを決めたりフリースローが入ったりした時に、3/4コートで2-2-1のゾーンプレスを仕掛けたことです。相手に心理的プレッシャーを掛け、ミスを誘発させることが目的だったと思います。 次号に続きます。